

◆第113号－2026年(2026年9月発行 A5版364頁)

カズオ・イシグロ『クララとお日さま』における語りの技法 ――ディストピア幻想とおとぎ話――	安藤 和弘
オペラ座の「狂言回し」 ――ロッシーニ『セビリアの理髪師』の現代的上演における劇場性――	新田 孝行
『国事詩集』第1巻「政治」部門（3）	里麻 静夫
南部の娘の挫かれた告発の軌跡 ――Go Set a WatchmanからTo Kill a Mockingbirdを読み直す――	久保 尚美
“that niggard blaze” ――アブ・スノープスと旧南部の幻影――	中野 学而
英語学習者コーパスにおける省略構造の使用 ――日本語話者と韓国語話者の比較――	小山 さや香
ドイツ語の現在完了形における助動詞選択階層に関する一考察 ――母語話者と非母語話者の自動詞に関する言語知識に着目して――	平川 眞規子 鈴木 一徳
霊性と存在一性 ――鈴木大拙と井筒俊彦――	小嶋 洋介
記憶と象徴としての世界 ――A.N.ホワイトヘッドの哲学における象徴作用にもとづく知覚論について――	佐藤 陽祐
自然における情動の深層構造（上） ――モートンの『ダークエコロジー』を手掛かりにして――	竹中 真也
「博労の娘」における眼差しの役割	板谷 洋一郎
物語と回復期――「オララ」の一読解	中和 彩子
メルヴィルの『レッドバーン』と「野蛮なアイルランド人」という句をめぐる（IV）	福士 久夫

◆第114号－2026年(2026年9月発行 A5版362頁)

公認心理師学部カリキュラムにおける「神経・生理心理学」科目シラバス内容の実態（東日本編）	越智 隆太 緑川 晶
神経心理学的アセスメント ――支援につなげる理解――	緑川 晶
中華人民共和国国家通用言語文字法の改正について	小田 格
楊人梗の思想について ――1940年代を中心に――	郭 暁英
何藩論 ――香港における1950年代以降ポスト・ピクトリアリズムの位相――	山本 明
郭沫若の歴史劇『棠棣之花』における劇中歌創作 ――1920～1930年代の複数作曲家による版本を中心に――	熊 楚月
ラテンアメリカからニューヨークへ ――マリア・ルイサ・ボンバルの自己翻訳小説における改作――	洲崎 圭子
ベルリン反ユダヤ主義論争の経緯 ――「ベルリン反ユダヤ主義論争」6――	平山 令二
シトー会の例話と歴史叙述 『大創立史』における修道会の記憶の形成	北舘 佳史
今日の台湾独立運動論（その2）	齋藤 道彦
隔てられる隣人――1950年代初頭サンフランシスコ湾区の日系人と華人	深町 英夫
上猪ノ原遺跡出土草創期土器の年代学的検討	遠部 慎
岩手県宮古市内遺跡出土土器付着物の炭素14年代測定研究 ――縄紋時代の実年代――	小林 謙一

◆第115号－2026年(2026年9月発行 A5版368頁)

Chemical Corporeality : Ugly Affects, Toxic Inheritance, and the Limits of Witnessing in Jesmyn Ward's Sing, Unburied, Sing	WAKE, Issei
ソシュールと反ユダヤ主義 (1) ――ライブツィヒ, ベルリン, パリ, ジュネーヴ――	金澤 忠信
レヴィナスの目を通した現象学における「方法」と「世代」 ――若きレヴィナスが直面したフッサールからハイデガーへの世代交代について――	高野 浩之
通信制大学と通学制大学の学生の入学動機と大学生活に関する基礎的分析	澁川 幸加 眞鍋 倫子 松田 美佐
通信制大学における学生間交流と学習に関する意識の関連	中尾 友香
非主流の後期中等教育を経由した若年層の通信制大学進学と適応 ――高校経験・進学理由・大学適応に着目して――	宮崎 朔
フ란ツ・ローゼンツヴァイク『救済の星』第二卷第三章の解釈 ――ローゼンツヴァイクの共同体論――	村岡 晋一
越境の声 ――台湾現代詩における日本語訳の経緯とその評釈	明田川 聡士
パウル・ツェラン詩集『息の転回』 (1)	北 彰
武州南一揆の成立と展開	西川 広平
近世金沢におけるカキの利用	畑山 智史
蘭溪道隆の禅思想 ――『蘭溪和尚語録』の検討から――	和田 有希子